

確かな学力を支える「学びに向かう力」の育成

～読解力の向上を基盤とした学習指導を通して～

平成29年度 大津町小中学校共通実践事項

- (1)話し手に体を向けて聞く (2)「めあて」と「まとめ」の明示
(3)家庭学習の習慣化 (4)県学力調査に向けた課題克服プリントの計画的活用

7月3日(火)
富永

27日(水)の横尾先生の中研についての通信です。まず、事後研の研究協議を中心にまとめていきます。その後、学校研究から見た成果と課題についてまとめていきます。

6月27日(水) 3年 国語科 「ゆうすげ村の小さな旅館」

今回の授業のめあては、「なぜ、つぼみさんやお客さんの耳がよくなったのか。」。まとめは、「つぼみさんやお客さんは、耳がよくなるまほうのききめがあるウサギダイコンを食べていたから。」でした。

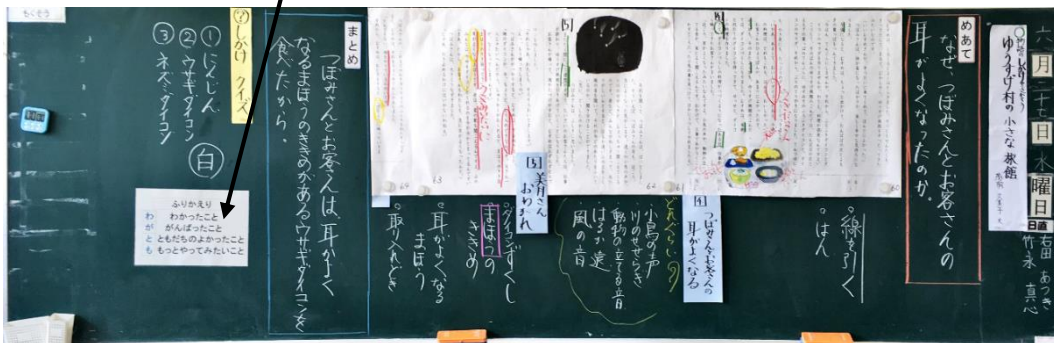
〈研究協議より〉

めあてや課題の設定について

- ①本時では、児童の初発の感想から問題解決型のめあてを設定した。児童の疑問からめあてを設定することで、友達の疑問をみんなで解決していくという学習意欲を高めることにつながった。

学びに向かう力・振り返りについて

- ②児童が主体的に学んでいくために、話合いの良さ(意義)を児童が実感できる授業の蓄積が重要である。例えば、(1)自分の考えが確信に変わった。(2)意見を聞いて別の考えをもてた。(3)話合いをしたことで、発表できた。といったことを経験することで、話合いの良さを実感できる。
③振り返りについては、(わ・が・と・も)の4つの観点からパターン化して行っていた。その授業を通して「何を学んだか(知識・技能)」、「どう学んだか(学習経験)」を定期的に記録する。自己の変容が見えるノート作りも学びに向かう力の育成の鍵となりうる。



〈学校の研究から見た成果○と課題△〉

- 問題解決型のめあては、効果的だった。児童の「なぜ」を引き出し、主体的に学ぶ姿があった。
△「対話的な学び」をねらう手立てとして、話合いを設定していた。叙述に即した話合いの姿は見られた。しかし、話合いの前後で個々の変容が見えにくかった。授業の最初と最後で同じ問いに対する答えを書くことで考えの変容を見る方法もある。

〈横尾先生の自評〉

子どもたちから出た疑問をみんなで考えることで、文章の中からヒントを探し、解決しようとする意欲が高まった。自分の意見を班の中で全員が話すことができた。これから、班での対話ができるように、学び方を子どもたちと作っていきたい。